モフモフ海鮮幻想郷

アシスト

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一匹のすくすく白沢が、
居酒屋の運命を大きく変える！

そんなお話です。相も変わらずモフモフとしたコメディが書けるようがんばります。

目　次

鰤と幻想入り ―― 1
鮪と白沢 ―― 12
退屈毀（こほ）る夜 ―― 20
海老と吸血鬼 ―― 28

鰤と幻想入り

「きゅー」

その日のお客さん第一号は、角の生えた緑色のモフモフだった。

都内からは遠く外れ、帰宅ラッシュの時間帯でさえあまり人が通らないような寂れた田舎町。そこにひっそりと佇む、古びた居酒屋の一国一城の主こそが俺である。

師匠の下から卒業し、自分の店を構えること早一ヶ月。ようやく自分の店が持てたと舞い上がっていたのはもう昔の話。今はどうやったらお客さんが来てくれるかを考えることに頭を悩ませる毎日だ。

別に全く来ないわけじゃない。『こんな廃れた商店街の隅っこに居酒屋なんてあったっけ？』と物珍しさに乗じて立ち寄ってくれるありがたいお客さんもいる。けど、場所が場所なだけあって常連と呼べるほど来てくれるお客さんはまだいない。

味には自信があるけれど、やっぱり立地の問題かねぇ。

いやでも仕方ない、都内は物価がえぐかった。

「きゅー」

過去を振り返ることで目前の現実から目を背けていたが、そろそろ直視しないといけないようだ。

緑色の体毛、立派な角、フワフワなしっぽにかわいいおてて。出入り口の戸をスルリと開けて入ってきたのは、そんな小動物。

いやなんぞこれ。

「きゅー？」

こちらから近寄っても逃げる様子もなかったので、試しに抱きかかえてみる。

「きゅー！」

なんだこのモフモフ。

すごくモフモフしてるぞ。

モフモフ以外の言葉が出てこないほどモフモフしている。俺に抱

きかかえられてもモフモフは嫌な顔一つせず、撫でてほしそうに「きゅー！」と鳴く。なんだこのかわいい生き物。ナデナデ。
知能もありそうだし、居酒屋に入ってきたってことはお腹がすいているのだろうか。何を食べるかわからないが、試しにお通し用の枝豆でも与えてみよう。
短い手（足？）を器用に使って枝豆をモグモグと食べるモフモフ。教えた通りに中の豆だけを食べているところを見ると、やっぱり知能はかなりのもののようだ。こっちの言葉にも理解したうえで反応してくれるし、人慣れもしてる。このモフモフはどこかで飼われていた子なのだろう。
となると飼い主を探さないといけないね。
モフモフよ。お前は一体どこから来たんだ？
「きゅー」
なるほど。わからん。

とりあえずカウンターテーブルに小さめクッションを置き、その上にモフモフを座らせておく。外はもう暗いし、明日の朝一に交番に連れて行ってあげるから、今日は招き猫ならぬ招きモフモフをしてもらおう。お客さんが来たら元気よくきゅー！だぞ。
「きゅー！」
うんうん。そんな感じ。
さて、今日はどのくらいお客さんが来てくれるかねぇ。
そう考えた矢先、出入り口の戸が再びガラリと開かれる。
「うぃ～っく……この店、あいてる～？」
その日のお客さん第二号は、角の生えた幼女だった。

……ごめんねお嬢ちゃん。ここ居酒屋なんだけど。
あと角って今流行ってるの？
「おじょうちゃん～？　なかなかほめ上手な人間だねぇ……よし決めた！　今日はー、ここで飲もう！」
俺の言葉に何故か上機嫌になった幼女は、千鳥足ながらも俺の向か

い側、カウンター席へと座る。
今の反応からすると、この娘は幼女は幼女でも合法な幼女なのだろう。見た目は小学生低学年も良い所だが、実は社会人5年目ぐらいなのかもしれない。あの角みたいなのはきっとカチューシャか何かだろう、うんうん。
幼女は右手に持っていた紫色の瓢箪に口をつけ、グイっと一杯飲み込んだ後、満面の笑みで注文を唱える。
「ぷはーっ！　よし、おやじぃー！　この店でぇ、一番おいしいおさけとさかなをぉ～、よろしくぅ～！」
しかしこの幼女、既に出来上がっておる。
あと俺はまだ25です。おやじではありません。断じて。

＊――――――――＊

「がぁー……ぐごー……ｚｚｚ」
「きゅー！」
幼女の相手をすること一時間。最初から酔っぱらっていたこともあってか、幼女はすやすやとカウンターにうつ伏せるように眠ってしまった。幼女の肩に毛布を掛けたところで、今度はモフモフが元気よく鳴く。
つまり、新しいお客さんが来店したということだ。
「ごめんくださいまし。2人分の席は空いているかしら？」
紫色のドレスを着た金髪の女性と、水色の着物を着たピンク髪の女性の二名様がご来店。
二人とも外人さんかな？　すごく美人だが……何かのコスプレだろうか。とても派手な格好をしておられる。
ともかく、いらっしゃいませ。カウンター席にどうぞ。
「珍しいわね紫。いつもなら白玉楼で飲むのに」
「たまにはいいでしょう、2人だけで外で飲むのも。それにこのお店は特別でね、グルメな幽々子も気に入るわよ」

「まぁ、紫がそう言い切るなんてもっと珍しい。それなら妖夢に勝るも劣らない、美味しい料理に期待しちゃおうかしら」
「ええ。そういうわけで大将さん、美味しい肴をおまかせでお願い。あ、お酒は生中で」
かしこまりましたー。
まずはお通りの枝豆と生二丁の用意をっと。
「なまちゅう？」「麦酒のことよ。ビールとも呼ぶの」「紫はものしりねぇ」と2人の会話を小耳にしながら準備を進める。
会話から察するに、紫と呼ばれた女性はうちの店のことを知っていたみたいだ。それはとても喜ばしいのだが、特別とはどういう意味だろう。確かに変わった場所にあるけれど、特別かと言われるとそうでもないと思うのだが…まぁいいか。とりあえず今は準備に専念しよう。
「きゅー！」
ん？　どうしたモフモフ。
えっ、もしかして手伝いたいの？
……その短い手でお盆は持てる？　おっ、意外にいけそうだね。そこにジョッキ二丁と枝豆の小皿をっと……そうそう、落とさないようにお客さんの下へ……よしよしその調子。
「きゅー」
「あらあら、かわいくてモフモフな店員さんね。特別ってこういうこと紫？」
「これはこれで特別だけれど、驚くのはまだこれからよ幽々子。ありがとう、すくすく」
「きゅー！」
紫さんは優しくモフモフを撫で、お盆の上の料理を受け取る。
ほほぅ、すくすくと言うのかこの生き物。日本には馴染みがないだけで、海外では有名な動物なのかね。これだけ可愛いなら日本でも人気が出そうなものだけど……あとでググってみよ。
頭の片隅でそんなことを考えながらも料理の準備を進めること数分、まずは一品目の用意が完了。

一品目の料理は鰤（ブリ）のお刺身です。
この時期の寒ブリは脂がのってて美味しいですよー、醤油とわさびをお好みでどうぞ。
「これは、お魚？　生で食べるなんて初めてだけれど……おなかが痛くなったりしないかしら？」
幽々子と呼ばれた女性が出された料理を見て首を傾げる。
外人さんは生モノに苦手意識を持つ人が多いと聞くし、初手にお刺身はハードルが高かったかもしれない。
だがしかし。ブリはまず生で味わってほしい。今日の鰤は特別新鮮なものが手に入ったし、もちろんお腹も痛くなりません。お口に合わなかったらお安くしますので、だまされたと思って一口どうぞ。
「大丈夫よ幽々子。たとえお腹を壊しても貴女は幽霊。死にはしないわ」
「ひどいわ紫、幽霊だって痛いのは嫌なのよ。でも不思議と美味しそうに見えるし…」
恐る恐るも、幽々子さんは丁寧な箸使いで一枚、ブリのお刺身を口に運ぶ。
「……ッ！」ガタッ！
瞬間、勢いよく眼をカッと見開き、カウンター席から立ちあがる幽々子さん。
うえっ、なんぞ。
「なっ、なんて新鮮で濃厚な味…ッ！　噛むたびにあふれる、お肉にも引けを取らない脂の甘みと旨み……こんな美味しさがまだ幻想郷にあったなんてッ！　もしかして河の底には、私の知らない未知の味が眠っている……ッ!?　妖夢ーッ！　釣り竿の用意よーッ！」
「きゅー!!」ｍｇｍｇ
高らかに叫ぶ幽々子さんとすくすく。
……ええっと、うん、アルコールのせいかな。テンションがおかし

いけれど、美味しさに感動してるには違いない。お口に合ったようで何よりです。
　すくすくもお客さんに合わせて鳴かなくても……ってあぁッ!?
お客さんに出した料理を食べるんじゃない！　お前も美味しさのあまり叫んでたのか！
「きゅー…」
　だって美味しそうだったんだもん…って。それはそうかもしれないけど、　お客さんに提供する料理は食べちゃめっ、だぞ。次から気を付けるように。
　申し訳ありませんお客様。すぐにお刺身の追加をご用意します。
「いえ、いいのよ。こんなにおいしいお魚、独り占めしたら悪いもの。たくさん食べていいのよモフモフちゃん。大丈夫、今日は全部紫持ちだから」
「え、っ」
「きゅー！」
　正気に戻ったのか酔いが一時的に醒めたのか、幽々子さんはゆっくりとカウンター席に腰を下ろし、すくすくを優しくなでる。紫さんの顔が一瞬引きつったように見えたが、まぁ俺には関係ないよね。
「それにしても驚いたわ。生のお魚ってこんなにも美味しいねぇ。お腹を痛めてでも食べたいと思う人間の気持ちもわかるわ、ねぇ紫。……紫？　どうかした？」
「……なんでもないわ、ええ、なんでも。気に入ってくれたようで何より。でも幽々子、妖夢に釣りに行かせるのはやめてあげなさい。半べソで帰ってくるだけだから」
「あらそうなの？　それはそれで一興だけれど」
「何故ならブリは、幻想郷には在りえない海を泳ぐ魚ですもの……あらホント、脂が美味しいわね。これはビール案件だわ」
「海のお魚……あっ。なるほど、そういうことだったのね。ということはもしかしてこのお店、紫が繋いだの？」
「偶然よ。素質を持っていたのが偶々このお店の大将だっただけの話。私は彼とすくすく白沢（この子）の出会いをお手伝いしただけよ……ぷ

はーっ！　この喉越しがたまんないのよねーっ！」
「紫、取り繕えてないわ」
「もーいいじゃない、お酒の場ぐらい素でいたって。もう疲れたの私。大将おかわり。次は生大でお願い」
かしこまりましたー。
生大入りまーす。
えっ？　二人の会話に突っ込まないのかって？　しないしない。
ゲンソウキョーとか外の世界とか、確かに突っ込みどころの多い会話だったけど、きっとあれでしょ。コスプレしたキャラを演じてる的な奴に違いない。
俺の知り合いにも一人、そういうのが好きな奴がいる。周りがどう思うかは別として、演じてる本人は楽しいみたいだし、ここはお酒の場。好きにやってもらうのが一番だよ。
すくすくもそう思うだろ？
「きゅー！」
だよねー。節度さえ守るなら、お酒は楽しく飲むのが一番さ。
さてと。紫さんはビールが好きそうだし、生大と一緒にこちらの料理をお出ししようか。

二品目はブリの照り焼き。濃厚なタレと柔らかいブリの身がベストマッチな一品。
少し濃い目の味付けにしてあるので、ビールとの相性は抜群ですよ。
「まぁ、良い色に良い香り。お酒にもだけど、これは白米とも合いそうねー……ちらちらっ」
幽々子さんが唇に指を咥えてこっちを見てくる。
ふふふ。もちろんご用意できますとも。はいどうぞ。
甘辛いタレがしみ込んだブリの身を、白米と一緒に頬張る幽々子さん。和食が似合うなぁこの人、食べる姿に不思議な色気を感じる。
「もぐ……んーっ！　美味しい！　やっぱり相性抜群ね！　甘辛いタレにも負けないブリの旨み、とってもいいわ。紫もそう思わない？」

「たいしょーッ!!　生大もう一杯ーッ！」
「あらー……紫ったら全く聞いてない。それにしても今日はペースが早いわねぇ」
「だってこれ、最高にビールと合うんだもの。それにここ最近、藍に飲みすぎだって怒られて禁酒させられていたから、今日はじゃんじゃん飲むわ！」
「きゅーっ」
「あら、ありがとうすくすく。　はぁー…お酒美味しー…」
　ふむ。幽々子さんは料理を楽しむタイプ、紫さんはお酒を楽しむタイプっぽいね。しかしすくすくよ、いつの間にビールを注いだんだ。いやいいけれど。
　幸せそうな顔で料理を食べる幽々子さんと、幸せそうな顔で生大をイッキする紫さん。お客さんの幸せそうな顔を見ると、やっぱり店を持った甲斐があったなぁと思える。いつかはもっと大きなお店を持って、もっと多くの人に料理を食べてもらいたいものだ。
　そのためにはまず、目の前のお客様により満足してもらわないとね。よし、最後の鰤料理、お出ししますかね。
　最後の料理はブリ大根。
　先ほどの照り焼きと違って優しい味付けとなってます。ビールもいいですが、こちらは日本酒と一緒に食べるのがお勧めですよ。
「それは聞き捨てならないわね。じゃあ日本酒をジョッキでむぐぐ」
「盃２つでお願いねー」
「ちょ、幽々子。なんで遮るのよ」
「だって私たち、まだ乾杯してないもの。乾杯は盃でするのが私たちの鉄板でしょ」
「むっ……そういえばしてなかったわね」
　日本酒をジョッキで出さずに済んだことに内心ホッとしながら、お酒の入った徳利（とっくり）と盃をお盆に乗せて２人に差し出す。
「それじゃあ紫、今日は何に乾杯しましょうか」
「そうねぇ、じゃあ私の１０日振りの飲酒に」
「もっとちゃんとしたのがいいわ」

「冗談よ。目が怖いわ幽々子。では……幻想郷と海鮮居酒屋『アキ』との出会いに」

『乾杯』

＊――――――――＊

「ふぅ…ごちそうさまでした。甘く煮込まれたブリに、ブリの出汁が染みた大根……天にも昇る美味しさだったわ」

「貴女はもう天に召された身でしょうに」

カウンターに並べた料理も、作り置きしていた鍋の中身も綺麗さっぱり完食された。

いやぁ、見てて惚れ惚れするほどの食いっぷり飲みっぷりだった。まさか今日仕込んでいた食材を全て食べ尽くされるとは。

特に幽々子さんの食べっぷりはフードファイターかと思えるほどすごかった。逆に紫さんは飲みっぷりがヤバかった。結局日本酒をジョッキで飲んだし。人外の如き飲みっぷり、すごい肝臓をお持ちですね。

「当前じゃない。妖怪だもの」

「私は幽霊よー。ひゅ～どろどろ～」

あはは。さいですか。

「すぴー……くかー……」

「きゅーっ」

飲みっぷりと言えば、幼女の飲みっぷりもなかなかだったが、まだ眠っている。すくすくが起こそうと耳元で鳴いても起きる素振りすら見せない。

「……れいうぅ……まだまだのみたんらいよぅ……ぐがー……」

しかも夢の中でまだ飲んでらっしゃる。この幼女、相当なアル中だね。まだ幼女なのに……。

しかし、そろそろ閉店の時間だ。気持ちよさそうな寝顔で眠っているところ申し訳ないが、起きてもらわないと困る。お会計もまだだし。

「大将。心配しなくても萃香は私が送っていくから大丈夫よ。会計も私が出しておくわ」

おや、お客さんのお知り合いでしたか。

ではお言葉に甘えて、よろしくお願いします。

「今日の紫は優しいのね。いつもなら見かけても放っておくのに」

「他の店ならね。けれどこの店は、幻想郷と外の世界の両方に属した、最も曖昧な場所にある。萃香が目覚めた後、寝惚けて裏口から出られると面倒だから、霊夢のところにポイしておきましょ。はい、ポイっとね」

そういって紫さんは幼女に向かって扇子を開くと、幼女は椅子の中に吸い込まれるかのように消えていった。ん？

幼女の座っていた椅子をよく見ると、ナニかが開いており、その中には無数の目玉がこちらを覗いていた。え？

扇子が閉じられると同時に、そのナニかも閉じる。

そして紫さんは何事もなかったかのように、こう言った。

「こうして出会えたことも何かの縁。言いたいことはあるだろうけれど、先ずは表口から見える景色をご覧になって」

紫さんに言われるがまま、俺は出入り口の戸を開き、外へ出る。

そこに広がっていたのは、ようやく見慣れてきた寂れた田舎町……ではなく、どことなく懐かしさを感じさせる、古き日本を里を再現したかのような光景だった。

念のため後ろを振り向くと、そこにあったのは間違いなく俺の店。掲げられた『海鮮居酒屋アキ』の看板がそれを証明している。

「ようこそ、大将アキ。幻想郷は、貴方の全てを受け入れたわ」

「ようこそー♪」

「きゅーっ！」

妖しげな笑みを浮かべながらそう口にする紫さんと、その後ろでフワフワと浮く幽々子さん。そして、俺の足元で歓迎するようにきゅーと鳴くすくすく。

ものの数分で言いたいこと、聞きたいことが山ほどできた。

とりあえず悟れたことは、ここは所謂『異世界』だということ。

ならば、俺が一番言いたいことはこれかな。

「……お支払いは円でお願いします」

鮪と白沢

幻想郷に店舗を構えて一週間。
「きゅー」「きゅー？」「きゅーっ」
モフモフが増えました。

＊――――――――＊

人生って何が起こるかわからないよね。まさかお店ごと幻想郷へやってくる日が来るとは夢にも思わなかった。
正確には表口だけが幻想郷に繋がっているだけで、裏口は俺の世界もとい、外の世界に繋がっている。故に、外の世界でも俺の居酒屋自体は健在だ。看板も表口も当然付いている。けれど、紫さんの不思議な力によって、外の世界において俺の店は他の人たちには認知できないようになっているらしい。
「きゅー」
そもそもどうして紫さんがそんなことをしたのか、原因はこのすくすくである。

なんでも紫さんはこの『すくすく白沢』なる生き物を認知できる人間を探していたのだとか。
で、俺がその素質を持っていたため、手っ取り早く居酒屋ごと幻想入りさせたんだとか。
そんで、俺に幻想郷中に散らばって生息しているすくすくをできる限り集め、保護してほしいんだとか。

いろいろと理解が落ち着かなかったが、一先ず全てを飲み込むことにした。何故とか思わないのが人生気楽に生きるコツ、っていうのが我が家の教えだ。

集めろとは言われたものの、紫さん曰く『すくすくは素質ある者に寄って来る特性を持つから、貴方は居酒屋で美味しいお酒と料理を提供しながら待っていればいいわ』とのこと。幻想郷でも外の世界でも、俺のすることは変わらずに済むのはありがたい。

あれよこれよと時が過ぎて一週間。

結果、増えたのがこの二匹だ。

「きゅー？」「きゅー！」

二匹ともピンク色の毛並みを持ったすくすくだが、片方には翼があり、もう片方はクジラを模した帽子を身に着けている。名前は…すくすくミスティアとすくすくみよいって阿求さんが言ってたかな。

理由はわからないが、すくすくの容姿は幻想郷の住人の姿を模しているようで。この二匹も例外ではなく、元となった人物がいる。まだ会ったことはないけれど、2人とも飲食関係のお仕事をしているのだとか。

そんな2人を模しているだけあってこの二匹、見かけによらず料理ができる。短い手足で包丁やフライパンを巧みに使いこなし、美味しい料理を作り上げる。すごいの一言である。

「きゅー…!!」

料理を褒めるとドヤ顔を見せる二匹。

後でいっぱいナデナデしてやろう。

ちなみにすくすく白沢はというと。

「きゅーっ」

「おおぅ……これ、私か……」

「あっはっは。かわいいじゃん慧音」

カウンター席で複雑そうな顔をしながら座っている慧音さんとにらめっこをしている。ご友人の妹紅さんはそれを見て笑いながらビールを一杯飲み、口の周りに綺麗な泡をつけていた。

この慧音さんこそ、すくすく白沢の元となった人である。満月の夜だけ角と尻尾が生える体質なんだとか。不思議な体質だなぁ。

「海の幸を取り扱っている居酒屋があると聞いて来てみたのだが、すくすくか…。知識としては知っていたが、実物を見るのは初めてだ」
「なぁすくすく。私のすくすくって今どこにいるか知ってる？」
「きゅー」
「なるほど。わからん」
「？　妹紅は自身のすくすくを見たことがあるのか？」
「まあね。昔はあちこちに生息してたから。いつの間にかパッタリ消えたけど、元気にしてるかなぁ」
「きゅー！」

昔を懐かしむように、妹紅さんはすくすくを優しくモフる。
口元に泡をつけたまま。
妹紅さんの言う通り、大昔、少なくとも５００年以上ぐらい前にはすくすくは野生で存在していたらしい。が、ある日を境にパタリと姿を消し、今になって再び現れたのだと阿求さんから聞いた。……あれ？　妹紅さん何歳（いくつ）だ？
いやいや、女性に年齢を聞くのは失礼千万。
俺は俺のすべきことを進めよう。

ってことで、本日の一品目は鮪（マグロ）の三種盛りです。
右から赤身、中トロ、大トロとなっております。大トロは気持ちわさび多めで食べるのをお勧めしますよ。

「ふむ、これが海の魚か。宝石のように綺麗な赤色の身……見た目はお肉のようだな」
「ちょっと白っぽいのもあるね。どれ一枚」
「こら妹紅、手づかみなんて行儀が悪い。ちゃんと箸を…」
妹紅さんは慧音さんの注意に耳を貸すことなく、大胆に大トロを指でつまみ、わさび醤油にチョンとつけペロリと一口頬張る。

「……んんっ!?　けーね！　これすごいよ！　すごくておいしい！」
「す、すごくておいしい？　すごく美味しいではなくてか？」
「うん！　この大トロっての、アイスみたいに口の中でとろける！
んでもって、んまい！」

妹紅さんは目をキラキラと輝かせて、慧音さんに熱く語る。
気持ちはよくわかる。大トロって初めて食べるとあんな反応になるよね。俺も子供のころ似たような反応をした記憶が微かにある。なつかしや。
「では私はこっちの赤身を……あむっ」
次に慧音さんは手慣れた箸遣いで一枚、赤身を口に運ぶ。

「……ッ！」ガタッ！
瞬間、勢いよく眼をカッと見開き、カウンター席から立ちあがる慧音さん。
うえっ、デジャウっ。

「んんッ！　肉厚だがとても柔らかい！　その上で噛むたびに確かな旨みがあふれてくるっ！　これがこのマグロという魚本来の味であり、それをわさび醤油がより強く引き立てている！　口の中に広がる何とも言えぬ幸福感！　これは、美味いッ！」
「きゅーっ！」ｍｇｍｇ

高らかに叫ぶ慧音さんとすくすく。
……ええっと、美味しいものを食べると叫びたくなる気持ちはわからなくもないけど、幻想郷の住人は少しオーバーリアクション気味じゃなかろうか。まぁ美味いと言ってもらえる分には嬉しいからいいけどね。

「……突然叫んでしまい申し訳ない。大将」
「うわぁー、顔真っ赤だよ慧音。恥ずかしがるぐらいなら叫ばなきゃ

よかったのに」
「いや、何故か叫ばなければいけない衝動に駆られてしまってな。今日は酔いが回るのが早いみたいだ。恥ずかしいと言えば妹紅、さっきから口元に麦酒の泡が髭のように付いているぞ」
「えっウソまじで!? それ早く言ってよ!」
我に返ったのか、ほほを赤く染めて恥ずかしそうにちょこんとカウンター席に座る慧音さんと、それをおちょくる妹紅さん。しかし慧音さんのカウンターにより、妹紅さんも顔を赤くしながら口元を拭う。微笑ましい光景だね。
そういえばすくすくよ。さっき慧音さんと一緒に叫んでたよね。もしかしてまたお客さんの料理をつまんだのかな? ん? アッキー怒らないから正直に言ってみなさい。
「き、きゅぅ…」
しょぼんと落ち込むすくすく。どうやら慧音さんのお皿から中トロを頂いていたようだ。
まったくもう。今日の賄い飯はマグロ丼にしてあげるから我慢しなさい。慧音さんにはちゃんとごめんなさいするんだぞ。

「きゅー…」
「ふふ、気にしなくていいよ。せっかくの可愛い顔が台無しだ。私も怒ってないし、ほら。撫でてやるからこっちに来なさい」
「! きゅーっ!」
「よしよし、良い子良い子。もふもふー♪」
「きゅー♪」
「……大将。こう見てると、慧音とすくすくって家族に見えない?
董子ちゃんがよく言ってる『尊みが深い光景』ってこういうのを言うんだろうね」
わかりみが深い。

「きゅー」「きゅー」
おっ、次の煮込み料理が出来上がったみたいだ。

火加減の管理ありがとう、すくすくミスティアにすくすくみよい。
二品目はマグロの角煮。
醤油と生姜をベースとした甘辛い煮汁で、程よい柔らかさになるまでマグロを煮込んだ一品です。味もしっかり染みてますので、ビールのお供には最適な一品となっていますよ。
「もぐ……んん、美味い！　濃い味付けではあるが、マグロ本来の旨みもしっかりと残っている。生姜の風味も食欲を刺激するし、これは箸が止まらないな！」
「ビールも止まらないやつだねこれは。ぷはーっ、うまうま」
「「きゅー！」」
「おっ。お前たちが作ったのか？　って、夜雀に鯢呑亭の看板娘か。そりゃ美味いわけだ。よし、お前たちは私がモフってやろう。慧音とは年季が違うところを見せてやるよ！」
「「きゅーっ！」」
妹紅さんは手慣れた手つきですくすくを撫で回す。すくすくたちも気持ちよさそうだ。
すくすくは本来警戒心の強い生き物らしいが、妹紅さんの前で寝転がり『お腹も撫でて！』と訴えるように見つめている二匹を見ていると、とてもそうには見えない。
改めてみると変わった生き物だなぁ。すくすくって。

「大将。マグロの角煮のおかわりを頼みたい。次は大盛で頼む」
「私はお刺身おかわり。あと熱燗もちょうだい。慧音、明日は寺子屋お休みでしょ？　今日は二日酔いなんて気にせずじゃんじゃん飲もう！」
「ふむ……羽目を外すのも偶には悪くないかな。よし乗ったぞ妹紅。大将、熱燗はこの角煮に合う銘柄を期待するよ」
「きゅー！」

「あいよ。期待されました」

＊――――――＊

閉店時間が過ぎると、俺は後片付けと皿洗いに追われる。量は多いけど、それだけたくさんお客さんが来てくれたってことだから、ちょっと嬉しい。

ぶっちゃけると、外の世界にいた時と比べてかなり稼げている。幻想郷には海が存在しないからか、海鮮目当てで来てくれる人が多いのが主な要因だ。あと、一人一人がめっちゃ食べるしめっちゃ飲む。おかげさまで今まで枯れ気味だった懐事情がパンパンに潤っている。嬉しい限りだ。

「きゅー？」「きゅ」「きゅーっ」

鼻歌を歌いながらお皿を拭いているところで、すくすくたちが不思議そうにきゅーと鳴く。

なんだろうと思ってカウンター席を覗き込むと、そこには3匹のすくすくに囲まれるように、見慣れないモフモフが中央に座っていた。

「きゅー」

綺麗な毛並みの黒色のすくすく。

妙に高貴なオーラを纏っているように見える。

はて、いつの間に現れたのだろうか。

とりあえず撫でよう。

「きゅーっ！」

うーん、かわいい。

黒髪と言うと思い浮かぶのは巫女さんと新聞屋さんの2人だが、この子はそのどちらでもない気がする。まぁ、まだ幻想郷に来て一週間しか経ってないしね。そのうち会えるかもしれないし、気長に待ってみよう。

……そういえば明日は満月だな。幻想郷にも月があるし、外に席を設けてお月見気分でお客さんに飲んでもらうのも風情があってアリかもしれない。

すくすく達もそう思わないか？

『きゅー……ｚｚｚ』

あっ、寝とる。もうおねむの時間か。
時計を見ると日付が変わっている。すくすくの体内時計は正確で、どれだけがんばっても日が変わるぐらいのタイミングで寝落ちしていまうのだ。
洗い物の前に寝室に運んであげよう。
起こさないよう優しくね。

退屈毀（こほ）る夜

「はぁ……」

天を仰ぐと満月が瞳に映る宵の口。
私は溜息を零（こぼ）しながら竹林を一人歩いていた。

永遠を生きる私にとって、『退屈』は最大の敵。縁側でお茶と茶菓子を摘まみながらのんびりするのも嫌いではないけれど、そればっかりじゃ面白くない。
気分転換に竹林をお散歩し始めたところで、頭を抱えて歩く妹紅の後姿を発見し「身体を動かすのも悪くないわね」と思って、背後から妹紅の頭めがけて金閣寺の天井の角を叩きつけた。
さぁかかってらっしゃい！と意気込んだものの、肝心の妹紅は『一回死んだら二日酔いがなくなったわ。サンキュー』と言って立ち去ってしまい、私の熱意は不完全燃焼に終わってしまった。

「はぁ……」

それからは特筆すべきこともなく、のらりくらりと竹林を歩き回っていたら一日が終わろうとしていた。今日も今日とて退屈な一日を送ってしまったと後悔し、またため息が零れる。何か面白いこととか、変わったこととか、その辺に転がってないものかしら。
……変わったことと言えば、今日の妹紅は調子こそ悪そうだったけれど機嫌は良かったわね。アイツにお礼を言われるだなんて、明日は槍でも降るのかしら。本当に降ってきたら面白いのだけれど。
そう思いながら再び天を仰ぐと。

「きゅー！」
「ぶっ!?」

空から降ってきた謎のモフモフが私の顔面に抱きついてきて、姫らしからぬ声が出た。
モフモフを顔から引きはがすと、懐かしい顔と視線が合う。
これは確か…すくすくといったかしら。見るのは何百年振りかしらね。
「しかも妹紅のすくすくじゃない。どうして空から降ってきたの？」
「きゅーっ」
短い手足を懸命に使ってジェスチャーしながら、すくすくはきゅーと鳴く。
なるほどね。わからないわ。
「きゅー…」
私がそう言うとショボンと落ち込むすくすくもこう。
相も変わらずかわいい生き物ねぇ…母性が刺激されるわ。
ご機嫌を取るために抱っこしてナデナデ。
「きゅー！」
ふふっ、あなたは顎の下を優しく撫でられるのが好きだったわね。覚えてるんだから。
しかし、すくすくもこうは一体どこからやってきたのかしら。降ってきたってことは月？　……さすがにあり得ないか。
「どうせだし、あなたも永遠亭に来る？　私の遊び相手になってくれるなら、ウサギ以上の待遇を保証してあげるわよ」
「きゅー」
「あらいやなの？」
「きゅ！」
すくすくは首を横に振ると、ビシッととある方向を指さす。少なくとも、永遠亭とは逆の方角。
指さす方角からやってきたのか、指さす方角へ向かいたいのか。おそらく後者。折角再会したんだもの、少しぐらいなら我儘に付き合ってあげてもいいわ。イナバたちが晩御飯の用意をして待っているだろうけれど、多少帰りが遅くなってもいいでしょう。

私はかぐや姫。
偶にはみんなを待たせる立場になるのも一興よね。

すくすくもこうの案内に従って歩くこと十分。やってきたのは人里だった。ここに来ることは珍しくはないけれど、この時間帯に歩くのは初めてかしら。
満月の光と提灯の灯りが淡く照らす人里の光景は、日中とは違う独特な魅力を感じる。
「それで、結局あなたはどこにいきたいのかしら？」
「きゅーっ！」
いつの間にか私の頭に乗っかったすくすくもこうは、元気よく一軒の居酒屋を指さす。
こんなところに居酒屋なんて建っていたかしらと疑問に思って看板を確認しようとしたが、視覚よりも先に嗅覚が反応した。
私の鼻が捉えたのは、バンダナと眼鏡を身に着けた人間と緑色のすくすくが、居酒屋の前で七輪を使い、貝のようなものを焼いている香り。
それは私の知っている香りに似ていた。
遥か遠い昔、まだ月にいた頃に感じたことある、あの香り。
懐かしい、潮の香り。

「きゅー！」
「おっ、らっしゃい。一名様……と一匹様でしょうか？」

それが、私と『海鮮居酒屋アキ』の出会い。
私の退屈に少しだけ、亀裂が入るのを感じた。

＊――――――＊

あれよこれよとなし崩し的に、夜空の見える外の座席に案内されてしまった。
ご飯を食べるつもりはなかったのだけれど、あの香りを嗅いだ途端お腹の虫が鳴ってしまったのと、その音を『アキ』に聞かれ「腹ペコ割引ってことで、お安くしますよ」と言われてしまい、食べざるをえない状況になってしまったのだ。久しぶりに顔を赤くしたわ……。
アキとはこの居酒屋の名前であると同時に、店主の名前でもあるみたい。本人曰く渾名(あだな)らしいけれど、本名は教えてくれなかった。
「そう言う家系なんです」って。どう言う家系よ。変な人間ね。
「きゅ！」「きゅー！」
アキが変なのは性格だけじゃなく、体質も変わっていた。
霊力も妖力も、あらゆる力を持たない外界の人間にも関わらず、幻想の存在であるすくすくを認知できる体質の持ち主。同時に、すくすくを引き寄せる何かを纏う人間でもあった。
つまりすくすくもこうはアキに引き寄せられてここまで来たのね。そのすくすくもこうはワーハクタクのすくすくとじゃれあっている。お互いをモフりあうその光景、見てて全く飽きないわ。
「きゅー」
この店には私のすくすくもいた。つい先日現れたらしい。
今は私の膝の上でチョコンと座っている。きっと撫でられ待ちね。
いいわよすくすくの私。数百年ぶりの会合だもの、料理が運ばれてくるまで思う存分撫でてあげる。ほら、ナデナデー。
「きゅー♪」
「「きゅー……！」」
気持ちよさそうに鳴く私のすくすくと、羨ましそうに眺めてくる妹紅とワーハクタクのすくすく。
待ちなさい。一匹ずつ丁寧にモフってあげるから。私はモフるのに妥協はしないの。
「お待たせしました。本日おすすめの一品、お持ちしました」

三匹を満足させるまでモフり尽くしたところで、アキが料理を運んできた。
「こちら、焼き牡蠣（がき）です。お好みでレモンやポン酢、タバスコをかけてお召し上がりください」
目の前に出された料理は、先ほどアキが店先で焼いていた貝。貝殻は岩のような見た目だけど、中には濁りなき白色をした大きな身が入っている。
久しぶりに感じる「初めて食べる料理」を目の前にする高揚感。見た目からは味の想像ができないけれど、先の香りからして、少ししょっぱかったりするのかしら。海に住む貝みたいだし。
そう思いながら牡蠣の身を箸ですくい、先ずは何もかけずに一口で頬張る。

「……っ！」

瞬間、口の中に広がる濃厚かつ芳醇な旨味。
これは……叫ばずにいられないッ！

「見た目からは想像できないほど濃厚さ！　クリーミーでまろやかなコクに滑らかな磯の風味、そしてほのかに感じる渋みと苦み！　その全てが同調、凝縮されることで一つのを旨味を作り上げている！　素晴らしいわ！」
「きゅーっ！」ｍｇｍｇ

思わず立ち上がり、高らかに叫んでしまうほどの美味しさ。
一緒に私のすくすくも高らかにきゅーと鳴く。
「あはは、大袈裟ですねぇ。でもお気に召したでようでよかったです」
そんな私に驚いた様子も見せず、むしろ見慣れたような優しい目で見てくるアキ。
……はっず。

「……今のは見なかったことにしてちょうだい。そして忘れなさい」
「ちょっと難しいです」
「忘れなさいよぉ！」

お酒も入っていないのに、つい口調が乱れてしまう。初対面に人間にこんなにもペースを乱されるなんて、今日の私はどうかしてるわ。
しかしこの牡蠣っていう貝、本当に美味しい。すくすくの私がこっそり私の分の牡蠣をつまみ食いするのも頷ける旨みね。
「ほら。そんなコソコソしなくてもいいから、あなたも存分に食べなさい。はい、あーん」
「きゅー！」ｍｇｍｇ
「ふふっ、美味しい？」
口いっぱいに牡蠣を頬張り、満足そうにすくすくは頷く。外の世界の海は良いわねぇ、こんなにおいしいものがあるなんて。静かの海にも生息していたら、月での生活ももう少し楽しく感じられたかしら。
折角だし、牡蠣と一緒に出された調味料も使って食べてみましょ。
レモンのサッパリとした風味、ポン酢のさわやかな酸味、どちらも牡蠣との相性は最高ね。
このタバスコ？って言う真っ赤なソースは初めて見るけど、食べてみて「なるほど」と思う。独特の強い辛味が牡蠣のクリーミーな味わいをこれでもかと引き立てる。これはお酒とも相性が良さそうだわ。
「お客さん。今日はお勧めの日本酒もありますがいかがでしょう」
「勝手に心を読まないでくれるかしら。というか、何でわかったの？」
「この子が教えてくれました」
「きゅー」

そう言うと、アキはピンクと紫の中間ぐらいの色をしたすくすくを抱きかかえる。
地底に住んでる覚妖怪にそっくりなモフモフ、というかソイツのモフモフね。第三の瞳が私をきっちりと捉えている。

この人間はすくすくの言葉もわかるのね……本当にただの人間なの貴方？

「……まぁいいわ。貴方のお勧めは期待して良さそうだし、一杯だけ頂こうかしら」

「かしこまました。ではこちら、『夜半の月』と呼ばれる日本酒です。名称も味も、今夜にうってつけの一杯となっております」

「『夜半の月』は秋の季語よ。今は春だけど」

「細かいことはいいんです。ささっ、どうぞ」

そう言って、お酒が注がれた盃をアキは差し出す。

盃に口を付け、お酒を少量口に含む。瞬間、清らかな香りと柔らかい甘味が口いっぱいに広がる。少し刺激は足りないけれど、この優しい後味は逆に癖になりそう。

ふと、盃に映った満月が目に入る。

『夜半の月』……深夜を照らす美しき月を意味する言葉。

私は地上での暮らしに興味を持って禁忌を犯し、故郷を捨てて地上にやってきた。そこに未練はない。

けれど今だけは、この満月が不思議と恋しく思える。

「きゅー？」

「あ、あれ？　もしかして、お口に合いませんでした？」

長く俯いていたせいか、心配そうな顔で私を見つめるすくすくとアキ。

……ホームシックは私には似合わないわ。俯かずとも、上を向けば月は見える。私の時間は無限にあるけど、一秒でも長く有効に使わないとね。

今はただ、この時を楽しもう。

「いいえ、とっても美味しいわ。気が変わったわアキ。お酒と牡蠣のおかわりと、他の肴もちょうだいな。貴方のお勧めをね」

「はいよ。よろこんで」
「きゅー！」

今夜は夜更かし。永い夜になりそうだわ。
帰ったら永琳たちになんて言い訳しようかしら。ふふっ。

海老と吸血鬼

幻想郷に来て最初に学んだことは、ここでは外の世界の常識に囚われてはいけないということだ。

こちらの世界には人間だけじゃなく、妖怪や妖精、果てには神様が実在しているとのこと。その中には何百年も生き永らえている者もいるようで、外見で年齢を判断することはまずできない。

加えて、幻想郷には未成年者飲酒禁止法が存在しない。妖怪だろうと人間だろうと、明らかにキミ２０歳未満でしょって方々がやって来ては、水を飲むが如くグイグイお酒を飲む。良いとわかっていても、そういう方々にお酒を勧めるのは未だに抵抗を感じる。

郷に入っては郷に従えって言葉もあるし、こればっかりは慣れるしかないよなぁ……まぁここは気楽に考えよう。

俺は老若男女誰彼構わず種族も問わず、美味しいと言っていただけるようなお酒と料理を提供すればいいってことだ。

「きゅー」

ちなみにすくすくもお酒を飲める。その小さい身体のどこに入っていくのかってぐらいグイグイ飲む。

特に飲むのは、最近現れた二本の角が生えた薄茶色のすくすく。

「きゅーっ」

すくすく萃香。幻想入りして一番最初にやってきたお客さんのすくすくだ。見た目は合法幼女だったが、彼女は『鬼』という幻想郷でも最強クラスの妖怪らしい。

手に持っている紫色の瓢箪からは無限にお酒が湧き出るようで、すくすく萃香は常に酔っぱらっている。すくすくたちに年齢の概念があるかはわからないが、飲み過ぎはダメだぞ。

「きゅー…」

瓢箪を取り上げると「かえしてー…」と言わんばかりに短い手をフ

リフリ伸ばして催促してくる。
その仕草に胸を突かれて返してしまう自分がいる。
ちくしょう、かわいい。限度は守って飲むんだぞ。

＊――――――＊

「咲夜。この酷く狭い古びた居酒屋が、本当に例の場所なの？」
「間違いありません。この十六夜、今まで一度たりともお嬢様に嘘を報告したことはありませんわ」
「さっそくダウトじゃん！　パチェ、どう思う？」
「……この店に入る瞬間、スキマ妖怪の力を感じたわ。ここが外の世界の居酒屋である証明としては充分な理由だと思うわよ」
「流石我が親友。説得力が違うわ」

カウンターに座るのは、まるで西洋の国からやってきましたと言わんばかりの服装のお三方。初来店のお客さんだが、中央に座る蝙蝠のような翼が生えた少女だけは見たことがあった。
以前、阿求さんに見せてもらった幻想郷縁起って本に載っていた。人里から離れた場所に建っている紅魔館と呼ばれるお屋敷に住む吸血鬼……名前はレミリアさんだったか。名前も外見も外国人、いや外国妖怪のそれだが、幻想郷の住人はみんな日本語で話してくれるからとても助かる。
本日は遠くから来てくださりありがとうございます。
ほら、すくすくもご挨拶。

「きゅー！」
「へぇ。人間もペットも、礼儀を弁えている所には好感を持てるわ。じゃあまずお酒をもらうかしらね。えーっと……咲夜、なんて言ったかしら」

「トリア・エズナマでございますお嬢様」
「そうそれ、トリア・エズナマってお酒を頂くわ。パチェもそれでいい？」
「私はお酒の気分じゃないから、お冷でいいわ」
　あいよ。なんか必殺技の名前みたいなイントネーションだったけど、とりあえず生で間違いないだろう。
　はいこちら。生中２つとお冷です。
　料理の方はお決まりでしょうか？
「お嬢様、何を注文しましょうか」
「ふっ、そんなの決まってるじゃない。カリスマの化身たる気高き吸血鬼である私の舌を唸らせる、最高の酒肴を所望するわ！」
「わかりました。では大将さん、辛すぎず苦すぎず酸っぱすぎない、子供向けの一品をお願いします」
「さくや!?」
　天然なのか、わざとなのか。特に悪びれる様子もなくそう注文する咲夜さんに、喫驚するレミリアさん。この二人、かなり特殊な主従関係を築いておられる。
　ともあれ、少なくともレミリアさんの味覚が見た目相応のものであることは確かなようだ。子供向けと言うと、頭に思い浮かぶのはレストランで定番のお子様ランチ。今日は海老（えび）を仕入れているし、お子様ランチには定番のあの一品を作ろうか。
　ではお客様。料理ができるまでの間、こちらのお通しをどうぞ。
　すくすくよ、配膳をよろしく頼む。
「きゅー」
「あら。このモフモフさん私にそっくりですね。お料理ありがとう、モフモフの私」
「パチェはこのモフモフが目的で私たちについて来たのよね」
「ええ。すくすくについての文献は大図書館にも少なくてね。謎の多い生物だし、実際にこの目で見てみたかったのよ。すくすくの咲夜には悪いけど、ちょっと調べさせてもらうわ」
　パチェと呼ばれた方はすくすく咲夜を抱き上げると、その全身を隈

なく触り出す。
　ふわふわな体毛に短くも柔らかい手足、モフモフな尻尾とおさげ、メイドをメイドたらしめるカチューシャとエプロン。それらを隅々まで触り、モフり尽くすパチェさん。くすぐったいのか気持ちいいのか、すくすく咲夜は嬉々として「きゅー！」と鳴く。
「きゅー……！」パルパル
　そんな光景を妙なオーラを放ちながら羨ましそうに眺めるすくすく。あれ、こんなすくすくいたっけか。新入りかな、ほら遊んでもらっておいて。
「で、何かわかったの？」「ええ。とてもモフモフだということがわかったわ」「それ触らなきゃわからなかった？」「お通しのきんぴらごぼう美味しいですねぇ」「きゅー！」と、お三方とすくすくのマイペースなやりとりを横目で見ながら準備を続けること数分。ようやく一品目がこんがり狐色に揚がった。

　こちら、エビフライです。
　ソースかタルタル、お好みの方を付けてお召し上がりください。
「えびふらい……見た目は普通の揚げ物ね。じゃあさっそく一口」
「お待ちくださいお嬢様、先ずはこの十六夜が毒見を」
「いいわよ毒見なんて。そもそも何が毒で毒じゃないかなんて人間と吸血鬼で違うんだから、するだけ無駄よ」
「しかしお嬢様の語彙力では食レポが…」
「何その意味分からない心配！　というか咲夜は私を子ども扱いし過ぎよ！　従者として主人を心配する気持ちは汲むけれど、私は貴女の何十倍も大人のレディ！　種種雑多な経験を通じて培った我が語彙に喝采しなさい！」

　レミリアさんはそう言うと、エビフライをフォークで突き刺し、ソースをつけて勢いよくかぶりつく。
　そして例の如くカッを目を見開き、ガタッとカウンター席から立ちあがる。

おっ。くるか？

「うまーい!!」

「きゅー！」ｍｇｍｇ

シ、シンプルぅー！

「大将さん！　今のお嬢様の一言には『口に入れた瞬間の衣のサクサク感と、その後から感じる海老のプリプリとした食感の組み合わせが絶妙ね！　甘辛いソースも海老の甘みとベストマッチ！　吸血鬼の舌をここまで唸らせるエビフライという料理、侮りがたしッ！』という意味が込められているのですよ！」ｍｇｍｇ

「そ、そう！そのとおりよ咲夜！　流石は我が右腕と言ったところね！　よくわかってるじゃない！」

「お褒めに預かり光栄です！」ｍｇｍｇ

レミリアさんの目がバタフライしながら泳いでいる。

今の絶対咲夜さんの感想でしょ。

思わずそうツッコミそうになるが、レミリアさんの名誉のために口には出さないでおこう。せっかく美味しいと言ってくれたのだ。気分を害することは言わないでおくのが優しさだよね。

「ふっ、なかなか良い料理じゃない。この味はトリア・エズナマとも合うわ。このお酒、見た目は普通の麦酒だけど、私にはわかる。麦酒とは異なる大人の苦みとも呼べる旨み……咲夜にはわからないかしらね」

「おっしゃる通りでございます！　私にはいつも飲む麦酒との違いがわかりません！」

「でしょうね！　大人の舌だからこそ理解できるのよこの違いは！」

ごめんなさい。それただの麦酒です。

スーパーなドライなんです。

思わずそう謝りそうになるが、レミリアさんの威厳のために口には

出さないでおこう。外の世界のビールと幻想郷産のビール、本当に違いがあるかもしれない。俺にもわからなかったけど。
「……美味しいけれど、私には少し油っこいわ。もう少しサッパリしたものはないかしら」
「きゅー？」
お酒が入っているからかテンションの高い2人とは逆に、ひとりお酒が入っていないパチュリーさんがそうオーダーする。エビフライを一本つまみ食いしたすくすく咲夜もご所望のようだ。
ふむ。そういうことならいいものがある。エビフライで使った海老とは別種類の海老を使った一品が。

というわけでコチラ、甘エビのカルパッチョです。
オリーブオイルと数種類のスパイス、そしてレモンで軽く味を整えた一品となっています。
「もぐ…。っ！　さっきの揚げた海老とはまた違う甘味ね。酸味の効いたさわやかな味付けも悪くないわ。暑くて食欲がない日なんかにもちょうどいいかも」
「きゅーっ！」
箸で一つ一つ、チマチマと摘まんでは甘エビを口に運ぶパチェさん。
居酒屋でお酒を飲まないといけないなんてルールはない。幻想郷では女性客も珍しくないし、パチェさんのように飲まない女性向けの料理のレパートリーを増やすのも悪くかも。
パッと思いつくあたり、海老とアボカドのサラダとかどうだろう。
すくすくよ、どう思う？
「きゅー？」
えっ、アボカドを知らない？
幻想郷には栽培されていないのか。今度買ってきてあげよう。
「パチェの食べてる料理も美味しそうね。外の料理が食べられるって噂は聞いてたけど、これは来て正解だったわ。吸血鬼の舌にも合うな

んて、外の世界の食材もなかなかじゃない」
「よかったわねレミィ。これならフランを連れてきても問題なさそうで」
「……えっ？　パチェ、気づいてたの？」
「何年貴女と親友してると思ってるのよ。フランと一緒に楽しめるお店を探しては、自らが毒味に赴く。少しでも吸血鬼の舌に拒絶反応が起こればフランは何をしでかすかわからないから、ってところでしょ。心配性のお姉ちゃんは大変ね」
「……フランには窮屈な思いをさせてたしね。少しぐらい、姉らしいことをしたいと思っただけよ。妖怪をそのまま受け入れてくれる料理店も多くないしね」
「お嬢様……」

先刻とは打って変わってしんみりムード。会話から察するに、何やら複雑な家庭事情みたいだ。
しかし、2人の会話を聞いてふと思ったことがる。
そういえば吸血鬼って弱点の多い種族だっけと。
日の光とか十字架とか、食べ物で言えばニンニクとか鰯の頭とか。ガーリックシュリンプを提供する前に思い出せてよかった。
よそ様の家族問題に首を突っ込むつもりはないが、折角来てくれたお客さんにできる限りのことはしてやりたい。うちは居酒屋、できることと言えばお客様の要望に沿った料理を提供すること。
それならば、一つ提案できることがある。
「レミリアさん。もしよろしければ、うちの店を予約しませんか？」
「予約？」
レミリアさんが首を傾げる。
「予め日程とお出しする料理を決めておくんです。お出しする料理に関してはレミリアさんが味見をして、吸血鬼の舌でも問題ないものに絞っておけば、妹さんも問題なく食べられると思いますし」
うちで扱う海鮮は日によって異なり、同じ魚を連日して扱うことは少ない。仮にエビフライが食べたいからといって、明日来店されても

提供できない可能性もある。
しかし予約なら話は変わる。作る料理のリストアップさえしておけば準備も容易だ。なんなら貸切予約にしてもらえば、万が一のことが起こっても他のお客様に迷惑をかける心配もない。
何よりうちには、優秀なモフモフもいる。
『きゅー！』
すくすくは意外にも強い生物なのだ。本気を出せば模した人物と遜色ないぐらいほど強く、またそのモフモフ感はどんな相手にも癒しを与えるほどのセラピー効果があるとか。頼りにしてるぞ。
「うちの店は妖怪でもウェルカムなので、レミリアさんさえよろしければ協力は惜しみませんよ。妹さんにも美味しい料理を食べてもらいたいですので。男に二言はありません」
俺がそう口にすると、レミリアさんは目を閉じ、指を顎に当てて考える素振りを見せる。
「……良い運命が見えたわ。大将アキと言ったわね、貴方を提案に乗るわ。さっそくで悪いんだけど、今日出せる料理を全て小皿で出してもらえるかしら。もちろんお代は全て払うわ」
「あらレミィ本気ね。そんなに食べられるの？」
「可愛い妹の為だもの、妥協はしないわ。それに、まだまだ食べ足りないのもあるしね。咲夜、私はこれから毒見のために3日に一度のペースでこの店に足を運ぶわ。フランには怪しまれないように上手く誤魔化しておいて」
「かしこまりました。しばらくの間、修行と称して美鈴に遊び相手を務めてもらいましょう」
「さぁアキ！　フランに振る舞う最高のフルコース料理、しっかり選別させてもらうわ！　まず一品目を出しなさい！　あ、それとトリア・エズナマもおかわりで！」
「きゅー！」

「あいよ！　ちょいとお待ちを！」

右手にフォーク、左手にビールジョッキを持ち、やる気に満ち溢れるレミリアさん。本当に妹思いの良いお姉さんだね。俺にも姉と兄がいるけど、兄はともかく姉は優しくない人だからちょっと羨ましい。

なお、すべての料理への感想が「うまーい！」だったのは別の話である。